妙の光（たえのひかり）

通刊49号 **復刊28号**
1999年12月22日（季刊）
角田山妙光寺 発行
新潟県西蒲原郡巻町
角田浜 〒953-0011
TEL 0256-77-2025

南天の実

本堂への廊下の外にある南天の木は、意外に大振りだが目に付きにくい。建物の陰で気がつきにくいのと、木そのものが地味な感じがするせいかもしれない。それが冬枯れのこの季節になると赤い実が印象的で、境内が白く雪化粧でもするといっそう鮮やかに見えてくる。

この木は幹は細く、背丈もたいがい二メートルと本にある。ところが以前ある寺で南天の床柱というのを見た。たしかフー天の寅さんで有名な柴又題経寺だったように記憶しているが。

覚えている方も多いと思うが、以前境内の裏庭に蜜柑の大きな木があって、正月に黄色い実をたくさん付けていた。ところが客殿工事の際の移植に失敗して枯らしてしまった。それだけにこの南天の実の赤は、貴重な冬の色だ。

実南天二段に垂れて真赤かな　　富安風生

妙光寺ではこの「妙の光」が寺報ですが、他でもそれぞれに発行する寺がたくさんあります。いくつかの寺とは交換していますが、なかでも神奈川県の「妙常寺寺報」は毎月発行され、いつもいい話が溢れています。ただやや長くてご紹介しにくかったのですが、今回そのごく一部を転載させていただくことにしました。

『一日を大切に』

龍雲寺　荒崎良徳上人

（「妙常寺寺報」本良信典師の文中より抜粋）

私は、ふと思うことがあって、東京へ嫁いでいる娘に手紙を書きました。

『私は今年六十歳になる。現代は寿命が延びたというから、あと二十年、つまり八十歳まで何とか生きられるのではないかと思う。とすると、今年三十歳のお前さんとは五十年間の付き合いということになる。しかし、生まれたばかりの孫とは二十年間しか付き合うことが出来ないのだ。俗に「子よりも孫の方が可愛い」というが、そんなところにも理由があるのだろうか』という手紙でした。漠然と指折り数え、何となく書き送っただけのことでした。娘から返事が来ました。読んで私は驚き、感動しました。

『お父さん、あと二十年の命だなどと縁起の悪いことを言わないでください。でも、落ちついて考えてみると、本当の事なんですね。娘としてはお父さんに百歳も二百歳も長生きしてほしいと思いますが、平均寿命を考えてみると、お父さんのお手紙は本当の事なのですね。そう思うと、急に淋しくなって、そして、悲しくなって、私、泣いてしまいました。

でも、お蔭さまで、私、目が醒めました。お父さんは金沢で私は東京で、お互い離ればなれで生活しているけれど、お父さんも元気、私も元気、そして、二人とも精一杯生きている。しかし、それはあと二十年だけのこと、二十年経ったらお父さんはいなくなってしまう、と考えると、今日の日がとても素晴らしく、かけがいのない大切な日であること

が心の底から納得出来たのです。

これまで、いろいろな先生から「毎日を大切に」とか「今日の日は二度とこない」などと教えて貰ってきましたが、聞いた時には「なるほど」と思うものの、すぐ忘れてしまいました。でも今、お父さんから「あと二十年しか生きないよ。」と言われてハッと気がつきました。

仏さまの教えの一つとして「今日の日を大切に生きる」を挙げることができると思います。茶道でいう「一期一会」です。その清々しい生き方は誰しも望むところです。そして、頭の中では理屈として分かっているけれども、実際にはなかなか実践できないことでもあります。

わたし自身、おこがましくも法話の中でそのことを話してきましたが、それは口先だけのことであり、心底から納得したことではありませんでした。

ところが、娘の手紙を読んで「一期一会」「今を生きる」とはどんなことか、娘に教えてもらったのです。娘は第一項に「縁起の悪いことは言うな」と申しました。続いて第二項に「本当のことだと分かった時、淋しくなって悲しくなった」と書いてくれました。そして、第三項に「お蔭さまで今日の日の大切さを心から納得できました。」と結んでくれました。

私は、このようなことを「二つの峠越え」と称しています。

最初の峠は「縁起の悪いこと」という峠です。

私たちは極力この峠に登ることを避けようとしますが、避けてばかりいては真実が見えてこないと思います。

思い切って　この峠を越えると、次に見えてくる

二つ目の峠は「厳しく、寂しく悲しい現実」という峠です。

仏教語でいうところの「諸行無常」であり「愛別離苦」です。この二つ目の峠を苦しみながら、泣きながら、やっと越えたときに眼の前に広がる素晴らしい風光こそ、「一期一会」の清々した毎日だと思うのです。

仏教はともすると、「暗い」「陰気」「消極的」などと誤解されがちです。それは、二つの峠で二の足を踏んで立ち止まってしまうからだと思います。汗を流して努力して、はじめて宝物が手に入るように、我慢して二つの峠越をして、生き生きした明るい毎日を迎えていただきたいと思います。

～～後略～～

信心

しめ縄奉納三十年

巻町白山　笹川耕一さん（75歳）

妙光寺に神棚はないが、茶の間に『大黒様』がお祀りしてあってしめ縄が飾られている。この大黒様、インドでは戦の神、台所の神として顔つきも怒りの相だった。日本には台所の神様として比叡山に伝わり、広く寺の台所で祀られ、さらにそれが福をもたらす福神として一般化し、今のふくよかで円満な顔つきになったと本にある。

毎年妙光寺の大黒様にしめ縄を作って、奉納してくれるのが笹川さんだ。三十年近く前になるが、先代住職が固いわらで苦労して作っているのを見て「俺が減反で青刈りしたわらがあるから持ってきて手伝う」といったのがきっかけだった。

しめ縄にするわらは、青々して細く短くしなやかなのが作りやすくりっぱにできる。以来笹川さんは春の田植えどき、しめ縄の分だけ苗を密に植えて細い稲を作る。ちなみにコシヒカリとか。それを八月に穂が出てから刈り取って、天日で二、三日乾燥させる。雨でも降って乾きが悪いと、カビたり青々しないのだそうだ。それを日に当てないように年末まで保管して、縄をなう前に一本一本穂を抜き取る作業をする。

以前はこうして準備した縄を持って、奥さんと息子を連れて寺でなう作業を何年か続けた。というのも数人の人手が要ったからだ。ところがその奥さんが脳梗塞で入院し、その年だけ本家にしめ縄作りを代行してもらった。以後また笹川さんが続けてきたが、奥さんは後遺症もあったりして数年後に亡くなられた。そんな経緯があって一人でなえるほどに手慣れたことから、近年は自宅で作った完成品を暮れに届けてくれる。

「いつ頃から始めたんだか忘れてしまったけど、もうそんなになるか。天気次第で毎年出来が違うけど、今年のわらはいいよ」と。数年前から寺の世話人もお願いしている。

寺の動き

各宗派本山から

お会式と先代法要

日蓮聖人第七百十八遠忌の法要、併せて先代住職の二十七回忌法要を、十一月十四日に営みました。さわやかな晴天に恵まれ、百十人が出席されました。

午前十時半から日蓮宗新潟県東部布教師会長で、新潟市妙覚寺の吉田住職が法話（写真）。十一時半から寺泊町法福寺の海津住職を導師に六人の式衆で法要を営み、参列者全員で焼香しました。引き続いて客殿の部屋を一杯に使って寺院、親族、壇信徒一緒にお斎をとりました。

地元や県内各地はもとより、遠くは埼玉県からわざわざ日帰りで出席された方もありました。ありがとうございました。

本堂工事臨時役員会議

十月二十二日、本堂工事の進行状況について臨時総代世話人会議を開催しました。

寄付申込総額

二億二千六百七十二万五千五百円

入金済額

一億一千三百八十四万八千八百八十八円

予算総額が当初より下方修正して二億四千万円ですから、もう一千万円余りの不足です。さらなるご協力のお願いを継続することと、関連予算の縮小を検討課題にしました。

木造建築で延べ床面積が千㎡を越すため、建築基準法の規制がとくに防災関係で厳しくなります。なるべく経費をかけずに適合させるためにやむを得ず、現在の客殿と本堂をつなぐ廊下及び勅使門（写真）を解体します。この廊下は昭和五十六年の客殿工事で新築し、横長のガラスが好評のところ。また勅使門は旧客殿のときからの建物で残してきました

が、老朽化が激しく移築や解体復元は無理です。

新本堂とは回廊で結びますが、直結せず火災の際の避難口として切り離すことで、法律に適合させます。ただしあくまでも現在二カ所で直結しているのが、一カ所になるということです。念のため。

今後の予定ですが、十二月に建築確認申請、自然公園内での新築許可申請の提出。工事委員会が業者選考基準の会議。一月に見積り依頼。二月に業者選考会議。三月に契約発注。五月連休後に着工。

以上を会議で決定しました。その他の細部はおいおいご報告します。

各宗派本山から安穏廟視察

安穏廟が丸十年を経過して、全国各地に類似のものが作られています。これまでも自治体はじめ視察は多かったのですが、奇しくもこの秋の一カ月間に、身延山はもとより他宗派の本山から視察が相次ぎました。妙光寺七百年の歴史でも例のないことです。

十一月一日法華宗本山三条本条寺貫首（住職）で法華宗管長が、信徒婦人会六十名とともに参拝し、昼食。とくに安穏廟について説明を求められました。妙光寺と本条寺の縁は古いのですが、公式な参拝は数年ぶりです。

十一月十三日曹洞宗管長、大本山鶴見総持寺貫首の板橋興宗老師（写真中央）と、監院（副住職）の渡邊剛毅師（写真右）が関係者八名を伴って、非公式ですがわざわざ訪ねて来られました。三十分安穏廟を見学して、約一時間住職と会談。気むずかしい高僧を想像していましたが、大変ざっくで話もはずみ「小川住職あんた総持寺のコンサルタントにどう

か」などと冗談も出るほどでした。その後本堂参拝、客殿、境内を回り感心して帰られました。

十一月二十九日、日蓮宗総本山身延山久遠寺から三十名が来られました。部長以下事務の女性も含めた全職員の研修で、第二班三十名が十二月七日に。本堂参拝の後、住職の妙光寺と安穏廟の説明に質疑応答、見学をして一時間半余りを過ごされました。

十二月二日臨済宗総本山京都妙心寺の法務部から八名が、参考にしたいと来られました。

時代とともに大きく変化した家族。それが寺の運営にも影響を及ぼしていることに、ようやく気づき始めたようです。

身延・房総団参

恒例の団体参拝旅行が十月四日から三泊四日、晴天に恵まれて無事行なわれました。各地区の檀家、安穏会員それぞれの親戚知人と多彩な顔ぶれで、五十名が参加しました。

一日目二階建て豪華バスで身延山へ。到着後広大な久遠寺を案内付で参拝、夕方の法要に参列。宿坊泊。二日目、朝のお勤め参列。朝食後七面山登詣組はバスで登山口まで行き、出発。夕方山上の『敬慎院』全員無事到着。早い夕食後に夜のお勤め参列。敬慎院泊。周辺寺院参拝組は奥の院、北山本門寺参拝。白糸の滝観光をして下部温泉泊。三日目、七面山組は年にわずかというすばらしいご来光を拝み下山開始、昌福寺を参拝した下の組と登山口の角瀬で合流し、昼食。その後新幹線、アクアラインを経由して房総小湊へ。温泉ホテルで最終日の宴会は芸達者なカラオケに踊りにと盛り上がる。四日目、誕生寺、静澄寺参拝、鯛の浦を船で観光。夜八時前後に各自帰宅。

濃密な行程で心配しましたが、極めて順調なうえ各寺院では丁重なもてなしを受け、充実した参拝旅行でした。初参加の安穏会員から「身延山の朝の法要に感動して、尼さんになろうかしらと思った」なんて言葉までありました。

秋の動向

一人暮しの会員で、横浜市のNさんが十月に亡くなりました。アメリカに住む長男夫婦（妻はアメリカ人）がその前の九月に相談に来て「母も大好きな妙光寺で葬儀をしたい」と希望されました。それならと先に火葬して、後日遺骨で葬儀をすると決めました。その際に火葬だけを依頼する葬儀社も紹介しました。

亡くなられたとき、仕事の都合で長男夫婦は日本を離れていました。そこでごくわずかな親族が打ち合せ通りに進め、偶然上京中の住職が遺骨を妙光寺に運びました。二週間後、帰国した長男夫婦と関係者が揃い、妙光寺本堂で葬儀を営みました。

それまで国際電話、パソコン通信などで頻繁に状況を連絡しあったのですが「葬儀に関する心配がないことでとても助かりました」とのことでした。

こうした心配事がありましたら、なんなりと直接ご相談ください。

今年八月のフェスティバルにお迎えした樋口恵子さんが、雑誌『ミマン』十一月号（文化出版局）にその印象を書かれました。「お墓から拡がる友だちの輪」と題して、他に京都の「女の碑の会」とスウェーデンの新しいお墓を紹介し、亡くされたお連れ合いを通して、遺された人たちの出会いの場としてのお墓の意義を綴られています。

妙光寺に関する部分は「十周年を迎える妙光寺安穏廟。こちらのご住職はまだ四十代の若さ。前回は気がつかなかったが、今回は地元の檀家の人たちの活躍と外部との交流が目についた。私は昨年来病気がちでこの日も体調は悪く食欲がなかったが、ここでのカレーライスは本当においしかった。百人を超える外部参加者への食事づくりはじめ、案内役、接待役に地元檀家が総出の感じで、気心が知れた同士でしか見られないチームワークのよさだった。とくに、シンポジウムの最後には檀家総代として挨拶した長老のことばが印象に残った。……」

さらに続きますが、これ以上は許可を得てからと思いました。しかしご本人と連絡が取れず間に合いませんでした。

会員の吉澤ハルヨ（新潟県）さんからフェスティバルの感想をお手紙でいただきました。ご了解をいただきましたので紹介します。

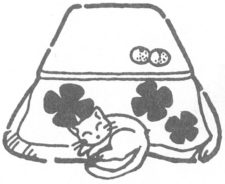
安穏廟に我が日蓮宗総本山身延山久遠

寺をはじめ、各宗派の本山から見学が相次ぎました。詳しくは「寺の動き」のページに紹介しましたが、それほどに評価されているということでしょう。十年の流れを痛感します。

四基目は最後のせいか、十一月一日の予約受付開始から二十五件という早い申し込みペースです。建設予定は平成十三年ですが、来年にできないか検討しています。

昨年秋に完成した九州の大分安穏廟で、一周年記念の「安穏の集い」が開かれました。住職と今回は妙光寺檀家総代の大滝さんが参加しました。十一月下旬でしたがさすが九州、ポカポカと暖かく檀家も交えて五十人弱の参加者が、外の前庭で昼食をとるほどでした。

主体の妙瑞寺は大分市内ですが、周りに畑が広がるのどかなところです。寺も安穏廟も小規模ですが、それだけにアットホームな感じがとてもいいです。全部で六十一区画の安穏廟も、十二の申し込みだそうです。



前　略

この度は、御住職様のお計らいで、安穏廟に夫の納骨を、無事すませることが出来ましたことを心より厚く、お礼申し上げます。

私もやっと立直ることが出来て、少しづつ前向きに生活をしています。八月のフェスティバル安穏に参加させて頂いて、本当にありがとうございました。

私は今年が初めてなので、先生方のお話を聞かせて頂いて、今までの考え方、今後の生き方などいろいろな面で、反省したり勇気づけられたり本当に感動しました。来年もぜひ参加させて頂きたいと思います。

そして安穏法会ですが、場所、景色、僧侶様の読経、なんてすばらしいことだろうと感激の涙で胸が、いっぱいになりました。

私も最後は、ここで眠ることが出来てこんな大勢の人達に、お参りして頂けるのだと思ったら、今まで不安な気持ちで生活して来たのが、この時一瞬にして心は秋晴のようにすみわたり、不器用な私ですが明日から頑張って生きて行こうと、自分の心に誓いました。

そしてお友達が何人も出来て、又お逢いしましょうねとお別れして、晴々とした気持ちで家に着きました。

すばらしいフェスティバル、本当にありがとうございました。

最後に御住職様並びに奥様、本当に大変だったと思います。心から感謝しております。

吉　澤　ハルヨ

寺庭から

二〇〇〇年が来ますね!!

私が生まれたのは六十年安保の年ですから、来年はちょうど四十才になります。二〇〇〇年に四十才なので、わかりやすくて気にいっています。

けれどもミレニアムと言って楽しそうな世の中とは違って、自分の中ではいつもと変わらず静かに、淡々とした思いで年末を迎えています。新年にあるかも知れないトラブルのことも、なんだか他人ごとのようです。それだけここでの私の暮らしは社会から遠いところにあるのかと、「はっ」としたりします。

お寺にも事務の関係でコンピュータが入りましたし、我が家でも娘たちはインターネットなどを使っていますから、念のため年末は使わないでね、なんて知ったかぶりをしましたが、私はそれにも興味が持てずにいます。最初にコンピュータを使えるようになったのは私なのですが、どうも相性がわるいのか、あまり、必要性がなかったのかもしれませんね。面倒臭くて。それに私がわずか数年前に使っていたパソコンはもう化石のように時代遅れになり、押し入れにひっそりと眠っています。それもとてもしゃくにさわるのです。

次の世紀は情報化と国際化がますます進むのだと聞いたことがあります。私の生活はたぶんどんなになっても変わりばえしないと思うので、時代に乗りきれないダサイ!暮らしになるかも知れないけれど、たくさんの情報に惑わされず、なるべくまわりでおきた出来事の事実だけを見て、ひっそりとその事を自分の中で考えて「よし」と納得していけたらいいなと思います。

妙光寺は今でもほとんどの情報は公開しているつもりでいますが、実は公開したいという思いを持ちながら、していないことがあります。これこそコンピュータが必要な繁雑な仕事なのですが、これをしてしまえば私も「〇〇丸儲け」という恐ろしいうわさから自由になれると思うし、お互いにすっきりとすると思います。

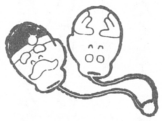
それは護持会の会計報告とともに、その他の収支も全部含めた経理の公開をするという事です。

新しい本堂とともに、どんな時代になってもゆるぎない体制をととのえて、新しい時代を迎え、信頼されるお寺の運営でありたいです。

混乱がなく心静かに新年を迎えられますようにお祈りしています。

小川なぎさ

行事案内



お札配り

十二月に入り来年の「お札」を持って、お経に各家に伺っています、住職と鎌田が手分けしてますのでどちらかがまいります。

大晦日　除夜の鐘

大晦日夜十時半から本堂で除夜法要。引き続き十一時四十分ころから除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に一回づつ撞いて、そのあと縁起物が当たる抽選があります。温かいコンニャクも。

古いお札などを燃すお焚き上げもありますのでお持ちください。

元旦　年始参り

元旦の朝九時ころから午後四時ころまで、年始初参りの受付をしています。新年を妙光寺本堂のお参りから始めましょう。

年回忌のお知らせ方法を変更

これまで年回忌をお知らせする札を祖師堂に張り出していました。しかし春には祖師堂も解体しますので、年内に直接各家にお届けします。届かないお宅は年回忌が当たっていないということです。

「星祭り」祈願

一年の家内安全、健康、幸運を祈願する「星祭り」は一軒二千円です。新規の方のみ年内にお申し込みください。

あとがき

ここのところ安穏廟の視察と四基目の申し込みへの応対、そして本堂工事の準備に追われています。そこへ「毎日新聞」での連載を本にするために書き足す原稿書きが、出版社との約束で年内締め切りです。さらには宗務院といって教団本部での、委員会座長の仕事を蒸し返されて急きょ呼び出されました。

そんなあわただしい年の瀬ですが、最後になる本堂の大掃除は思い出になるよう念入りにやろうと、家族で話しています。

誠に勝手ながら個々への年賀状は略させていただきます。どうぞよいお年をお迎えください。そしてまた宜しくお願いします。

（小川）